令和３年度　徳島県立農林水産総合技術支援センター
農業大学校学校評価　計画表

本年度の重点目標①　多様な進路に応じた人材育成
　一人ひとりの社会的・職業的自立に向け、学生個々の進路やニーズに対応した教育を行い、生涯にわたる社会人・職業人としてのキャリア形成を支援する。

課題		活動計画（具体的方策）		評価指標（数値目標）
①	キャリアプラニング（将来設計）能力の育成	1	進路希望調査、三者面談、進路相談会等を実施し、1年次生のうちから学生に早期の進路決定意識を醸成させ、進路決定を支援する。	個人面談を年間3回以上実施し、1年次の後期開始時点での進路目標決定者を90％以上にする。
		2	徳島県農業法人協会、公共職業安定所、国際農業交流協会等及び人材育成会社等と連携したキャリア教育を推進する。 進路指導担当、学生支援担当及び2年担任等で進路面談を実施する。	農業法人との交流会を各学年1回、公共職業安定所と連携した進路ガイダンスを1年次後期から2年次前期にかけ2回以上、人材育成会社によるキャリア教育を2年次で2回以上実施する。 2年次生の進路未決定者に対し個別進路面談を進路が決定するまで必要な回数実施する。

課題		活動計画（具体的方策）		評価指標（数値目標）
②	個々のニーズに基づいたマンツーマン指導の充実	1	学生に基礎的・基本的知識を確実に習得させ、学力向上を図る。	職員の授業改善に係る肯定的評価を90％以上にする。 講義で行われる教養科目・専門科目、それぞれの不認定者数を10％未満にする。
		2	進学希望者には、「進学対応カリキュラム」により、学力向上を支援する。特に編入学試験等で必要となる英語・化学・生物・小論文・口頭試問においては、補習や個別指導を行う。	進学を希望する学生の合格決定率60％以上を目指す。
		3	農業法人との交流会、履歴書作成指導等の実施により、早期から就職活動意欲の醸成を図る。	概ね2割以上の1年生が農業法人との交流会をインターンシップへの参加につなげる。 1年次の1月には履歴書の書き方に関する指導を開始し、必要に応じて個別に指導する。
		4	学生のニーズに対応した資格取得特別講座を開催し、資格取得を支援する。	造園技能検定、危険物取扱者試験、毒物劇物取扱者試験、大型特殊免許、大型特殊けん引免許、農業技術検定、フォークリフト、わな猟免許、家畜人工授精師、土壌医検定、日商簿記検定に係る特別講義を開催する。学生の80％以上が特別講義を受講する。
		5	前年度までの受験報告をもとに作成した「就職・大学編入試験受験報告書」や、「就職試験でよく聞かれる質問集」、「就職試験面接指導マニュアル」を活用し、各々の進路に合わせて個別の面接指導を行う。	進路指導に対する学生の肯定的評価を80％以上にする。 年度末の進路決定率を90％以上にする。

※「評価」及び「総合評価の評定」の基準　　A：十分達成できた　B：概ね達成できた　C：達成できなかった

課題		活動計画（具体的方策）		評価指標（数値目標）
③	高度情報化への対応とコミュニケーション能力並びに問題解決能力の育成	1	現在のパソコンにおいて事実上の「標準」となっている「Microsoft Office」の各ソフトウェアを活用できる能力を育成する。 講義や実習において、スマート農業に関するカリキュラムを充実すると共に、学校・クラス運営にもICTの活用を推進する。	学生アンケートで情報活用能力に関する自己評価を実施し、ワード、エクセル、パワーポイントを活用できる学生を80%以上にする。 スマート農業関連授業を前年の230%とする。また、学生向けタブレットの整備を100%にする。
		2	プロジェクト学習における計画段階から調査・研究に至る一連の取組や、それらの成果や課題をまとめ、発表する機会を設定することにより、正確かつ的確な情報伝達能力、並びにプレゼンテーション能力を育成する。	コース内で、プロジェクト学習の進捗状況を発表する機会を、年間3回以上設定する。 プロジェクト成果発表会で学生の8割以上が職員から70点以上の評価を得る。
		3	ワークショップやグループ活動等、知識を相互作用的に活用する機会を授業や実習に取り入れ、言語活動を活性化させることにより、思考力・判断力・表現力等を育成する。	コース実習の時間のうち、年間30時間以上を、話し合い・討論・発表などの言語活動の時間にあてる。

課題		活動計画（具体的方策）		評価指標（数値目標）
④	体験的な学習活動による実践力の育成と社会性の醸成	1	学生実習やプロジェクト学習を「そらそうじゃ」の業務や商品開発と一体とみなし、各業務担当ごとの実践的な運用手法を策定し、組織的に指導助言できる体制をつくる。	「徳島農大そらそうじゃ」の業務担当単位で活動する時間を、月1回以上確保する。策定する運用手法に対する学生と職員の肯定的評価を80％以上とする。
		2	模擬会社「徳島農大そらそうじゃ」の運営や活動を通して、個人の責任や協力を重んじる態度や姿勢を農業大学校の文化として定着させる。	学生アンケートを実施し、模擬会社活動における「責任感」や「協力」等に関する肯定的評価を90％以上にする。
		3	「徳島農大そらそうじゃ」の活動や「きのべ市」の開催に関する広報活動を積極的に行い、「きのべ市」の知名度向上とファンの増加を図り、来店者の増加を目指す。	「徳島農大そらそうじゃ」の活動状況や「きのべ市」の開催案内を広報誌「GoGo農大」やSNSを通して情報発信する。
		4	学生の研究課題や進路に対応した校外での「農業・6次産業体験学習」を実施し、研修先の支援を得ながら職業体験を通じて実践力と社会性を育成する。	体験学習によって実践力や社会性が向上した学生を90%以上にする。
		5	「農業・6次産業体験学習発表会」を開催し、学生が感じた成果と課題を整理して発表することで、学習内容の強化と定着を図る。	発表会に向けた事前準備の段階の個別指導を充実させ、全員が合格基準を満たす発表ができるようにする。
		6	農業・6次産業巡見等を通じて県内の特徴的な農業や地域社会について知り、郷土愛を育む。	研修の機会を3回以上設ける。

※「評価」及び「総合評価の評定」の基準　　A：十分達成できた　B：概ね達成できた　C：達成できなかった

課題		活動計画（具体的方策）		評価指標（数値目標）
⑤	特別活動・課外活動の活性化による自主・自律性の醸成と仲間づくり	1	学生生活を活力あるものとするためにサークル活動、自治会活動、農学連行事などの自主的運営を支援する。	農大祭においてサークル活動や自治会活動の成果を展示する。 農学連スポーツ大会への全種目参加、ならびに競技の運営協力を通じ、他県の学生と交流を深める。
		2	学校行事（剣山登山、農大祭、収穫祭、スポーツ大会等）について仲間が共同し企画、運営することを支援し、行事を成功させる。	各学校行事の事後アンケートを実施し、学生の満足度を80％以上にする。

課題		活動計画（具体的方策）		評価指標（数値目標）
⑥	積極的な教育活動の改善並びに学校運営の改善	1	課長会、コース会等を定期的かつ効率的に実施し、学生指導、コロナ禍における対応をはじめ、危機管理、コンプライアンスなどに関する情報交換や研修を行うことで、教育課題の共通認識、指導情報の共有化、並びに教職員の資質向上を図る。	課長会を月1回以上、コース会を月2回程度実施し、学校運営改善や教育指導改善につながる研修（勉強会）を継続的に実施する。 組織アンケートを行い、学生の理解を深める情報交換や組織力等に係る職員の肯定的評価を90％以上にする。
		2	定期的に、学校教育目標に基づく具体的な取組のモニタリングを実施し、指導の進捗状況や適切さを評価する。	指導の進捗状況を適切に評価するため、校務分掌やコースの業務に関するモニタリングを年2回実施し、更に、外部評価も行うこととする。
		3	個人情報に十分配慮し、共有フォルダを活用した情報共有体制を構築していく。また、より検索し易いフォルダの体系を構築する。	個人情報管理の適正化と必要なファイルの検索性向上のために、ネットワークサーバーのフォルダ構成を再構築する。構築するにあたり、検討会を年3回程度行う。
		4	高等学校との連絡・連携を密にし、学生の生活指導や教育活動の改善に活かす。	年2回の高校訪問や電話連絡を通して、学生に関する情報交換を行う。

課題		活動計画（具体的方策）		評価指標（数値目標）
⑦	心の通う人間関係を構築する能力の素地養成	1	教職員の人権意識を啓発するために人権研修を行う。また、いじめなどの問題を早期発見するための研修を行い対応能力を高める。	学校評価アンケートにおいて、授業、実習や行事を通じて、学生の人権意識を高めるよう配慮したと回答する教職員が90％以上とする。
		2	学校生活において、問題がある学生には面談し、心理的な問題等を早期に発見し、組織的に対応する。	学校評価アンケートにおいて、人権を尊重する仲間づくりができたと回答する学生が80％以上とする。
		3	学生の悩みを解決するために、学生、保護者、教職員による三者面談を開催する。学校と家庭が連携し、協働する体制を構築し問題解決にあたる。 また、スクールカウンセラーを配置し、カウンセリングを受けられる体制を整備する。	年1回の三者面談に加え、学校生活に関する調査を年2回実施し、いじめをはじめとする学生生活上の問題を早期発見するとともに、必要と思われる学生全員に教育相談を実施し、問題解決を図る。 スクールカウンセラーの配置を令和3年11月から令和4年3月までの間、試行する。

※「評価」及び「総合評価の評定」の基準　　A：十分達成できた　B：概ね達成できた　C：達成できなかった

本年度の重点目標②　地域農業への寄与
　農業体験学習、模擬会社の運営、6次産業化への取り組みなどを通じて、社会との連携を深め、総合的な指導体制のもと、幅広い経営能力を養成するとともに、地域農業等に寄与する。

課題		活動計画（具体的方策）		評価指標（数値目標）
①	栽培から販売までの知識と技術を持った人材の育成（農業生産技術コース）	1	栽培・飼養管理について役割分担し、日々の栽培・飼養管理を主体的に実践させ、年間を通した体系的・実践的な農業の知識並びに技術を習得させる。また、先進的な栽培方法について知見を深める。	学生が栽培・飼養に関する知識及び技術を習得して、それぞれがこれまでの経験に基づく農業の課題解決に努め、生産技術の向上につながるプロジェクト課題を80％以上設定する。
		2	「農大祭」や「きのべ市」で販売する果物、野菜、花苗等の栽培方法、機能性や調理方法等について学習する時間を設け、十分な知識を習得させる。	農産物の栽培・貯蔵・流通・調理法等に対する学生の知識に関する調査を、来客に対し実施するとともに、生産現場の視察研修や実践を授業時間を活用して実施し、理解度を80％以上とする。
		3	地域の特色を活かした作目の課題を解決するための高度かつ専門的な栽培・飼養技術を実証するとともに、その技術の有用性を、作目の需要や生産効率なども含めて総合的に判断する力を育成する。	地域に貢献できるような課題解決プロジェクトを選択して、その成果を地域に発信する。

課題		活動計画（具体的方策）		評価指標（数値目標）
②	農作物の付加価値販売につながるビジネススキルを身に付けた人材の育成（6次産業ビジネスコース）	1	卒業論文プロジェクトにおいて、6次産業化を伴う農業ビジネスモデルを研究・実践する。	プロジェクトで「6次産業化」ビジネスモデルの研究に取り組む学生を70％以上にする。
		2	学外での実践活動における、市場調査等を通じて、消費者や社会のニーズを把握、分析し、商品開発や販売戦略等に活かす。	学外における販売活動を通じ、市場ニーズの調査を行い、活用する学生を1・2年合わせて60％以上とする。
		3	プロジェクト研究に取り組む過程で、プロジェクトマネジメント、ブレインストーミング、PDCAサイクル等の各種の手法を習得させる。	課題解決のための手法を利用できる学生を70％以上とする。

課題		活動計画（具体的方策）		評価指標（数値目標）
③	地域農業への寄与のための体制づくりと、研究成果や学生活動に係る積極的な情報発信	1	平成30年度より稼働した六次産業化研究施設を活用し、商品開発に取り組み、地域社会へ発信する。	コースや模擬会社において、加工品を10品以上試作し、校外販売研修やSNSなどを通して地域に発信する。
		2	学生の研究や学校生活、「そらそうじゃ」の活動状況等定期的な広報等を作成する。 また、農大HPその他の情報発信ツールを活用して農業関係機関、関連企業、高等学校だけでなく、一般社会に対しても積極的に情報発信を行う。	教育活動に関する広報紙「GoGo農大」を年間12回以上作成して公開する。募集案内等をHPにて2週間程度で更新し、最新の情報を地域社会に発信する。Twitterアカウントを作成し、最新の学生活動等の情報を2週間程度で更新し、情報を発信する。
		3	本校の教育活動に関して積極的な情報発信・広報活動を行い、未来の徳島県農業を担う意欲と活力に満ちた新入学生を確保する。	高校訪問を年間2回以上行い、高校でのガイダンスにも積極的に参加する。また、高等学校の依頼があれば、キャリア教育に係る体験的な活動の実施に協力する。 広く社会人も含めて積極的な参加を募りオープンキャンパスを開催する。

※「評価」及び「総合評価の評定」の基準　　A：十分達成できた　B：概ね達成できた　C：達成できなかった

※「評価」及び「総合評価の評定」の基準　　A：十分達成できた　B：概ね達成できた　C：達成できなかった